

八重山歴史研究會報

『北木山風水記』を読む

—資料づくりにも事務局奮闘中—

三月二十九日に開催された定例会でも、引き続き「北木山風水記」の読み合わせを行いました。ところが、「北木山蔵元風水記」には簡単には理解できない風水の知識がたくさん詰め込まれています。

現在、出来る限り読みやすくするための資料を作成していますが、場面場面によって基本となる盤が変わるので一筋縄ではいきません！

でも、少しずつでも情報を提供していきたいと思えます。

「八宅方位」の八宅、「三元氣運」の三元とは

八宅風水とは、いわゆる風水の流派の一つです。大きくわけて三つの流派があるようで、八宅派、三合派、三元派というのが代表的だそうです。八宅風水は中国唐代の風水師が最初に行ったと言われ、原書となっているのは清代（一六四四

第 60 号

編集・発行 八重山歴史研究会
発行日 二〇一〇年四月一九日
事務局・会計 島袋（八重山博物館） ☎ 八二一四七二二
題字 玻名城泰雄氏

年（一九一一年）の『八宅明鏡』です。他にも同じく清代に八宅風水に関する書物が多く残されていることから、この時代に盛んになったようです。このような流れをもつ八宅風水が琉球の検分にも利用されたと考えられます。

あわせて三元の氣運とは、明代末〜清代初め（一六〇〇年代）に発案されたもので、三元九運という考え方があり、六〇干支を三分割して二〇年を一単位とする時間を考慮した新しい考え方です。

「坐（座）山と坐（座）向」、宅の意味

坐向から説明すれば、気がたくさん入ってくる方向を指します。建物だと玄関となるでしょうか。ただし現在のマンションなどだとベランダ側の広い窓になることもあるようです。坐山とは坐向の反対側であり、もしすぐ後ろに山があれば、そこが坐山となりますので坐向はその反対となります。換言すれば山がなくても「坐山」はありますし、坐向が入口とは限らないということになります。

なお、「北木山蔵元風水記」の中に、

蔵元大堂、坐艮向坤、是為艮宅。大門開在坤方、是為坤門。按八宅方位、艮宅生氣在坤、大門在坤、尤吉。但玄館在大堂前、不吉。

とあります。住宅等建物掛は門が開いていて気が流れ込んでくる方向で決まるので、蔵元の建物云々よりも門の位置が坤ということは、自ずと建物の坐山は艮ということになります。よって、坐山にある方位が住宅（建物）掛となるので艮宅となるのです。



ら吉であり、同じ坤（西南）の方向が巽宅だと大凶、坎宅の場合には最大凶になってしまうのが難しいところです。

艮宅の吉凶方位盤を見てみると、上図のようになります。ここで、改めて「北木山蔵元風水記」の記載を見ると、「艮宅生氣在坤」とあって、坤の方向は最大吉で生氣を意味することが分かります。しかし、これは艮宅だから吉であり、同じ坤（西南）の方向が巽宅だと大凶、坎宅の場合には最大凶になってしまうのが難しいところです。

三元の周期と九運

三元	紀元	宮	九運	
下元	七運 甲子 1804 ~ 癸未 1823	兌	七赤破軍運	7旺、8生、9進、6退、5衰、4死、3煞、2煞、1煞
	八運 甲申 1824 ~ 癸卯 1843	艮	八白左輔運	8旺、9生、1進、7退、6衰、5死、4煞、3煞、2煞
	九運 甲辰 1844 ~ 癸亥 1863	離	九紫右弼運	9旺、1生、2進、8退、7衰、6死、5煞、4煞、3煞
上元	一運 甲子 1864 ~ 癸未 1883	坎	一白貧狼運	1旺、2生、3進、9退、8衰、7死、6煞、5煞、4煞
	二運 甲申 1884 ~ 癸卯 1903	坤	二黒巨門運	2旺、3生、4進、1退、9衰、8死、7煞、6煞、5煞
	三運 甲辰 1904 ~ 癸亥 1923	震	三碧祿存運	3旺、4生、5進、2退、1衰、9死、8煞、7煞、6煞
中元	四運 甲子 1924 ~ 癸未 1943	巽	四緑文曲運	4旺、5生、6進、3退、2衰、1死、9煞、8煞、7煞
	五運 甲申 1944 ~ 癸卯 1963	中	五黄廉貞運	5旺、6生、7進、4退、3衰、2死、1煞、9煞、8煞
	六運 甲辰 1964 ~ 癸亥 1983	乾	六白武曲運	6旺、7生、8進、5退、4衰、3死、2煞、1煞、9煞
下元	七運 甲子 1984 ~ 癸未 2003	兌	七赤破軍運	7旺、8生、9進、6退、5衰、4死、3煞、2煞、1煞
	八運 甲申 2004 ~ 癸卯 2023	艮	八白左輔運	8旺、9生、1進、7退、6衰、5死、4煞、3煞、2煞
	九運 甲辰 2024 ~ 癸亥 2043	離	九紫右弼運	9旺、1生、2進、8退、7衰、6死、5煞、4煞、3煞

「九宮方位」とは
今から約四〇〇〇年前に中国の洛書から成り立ち、数字の配列を用いた、天、地、人を占う方法のひとつです。九宮の各星の配置は年によって変化します。

- 一・坎 水に属する。一白貧狼運。
 - 二・坤 土に属する。突然死などの殺の方向。二黒巨門運。
 - 三・震 木に属する。三碧禄存運。
 - 四・巽 木に属する。四緑文曲運。
 - 五・中 土に属する、災害死などの懸念がある刹の方向。
五黄廉貞運。
 - 六・乾 金に属する。六白武曲運。
 - 七・兌 金に属する。「旺気」を意味し、事業の成功や繁栄が期待できる吉の方向。七赤破軍運。
 - 八・艮 土に属する。「生氣」を意味し、事業の将来への拡大が期待できる吉の方向。八白左輔運。
 - 九・離 火に属する。九紫右弼運。
- 当時の九宮の利用と現在の九星とは若干考え方が異なる場合があるようですが、基本的に九星では八は八白土星を意味し、この星が入っている方位は旺気となり、大吉と判断します。次に九紫火星ですが、この星が入っている方位は生氣で、良い気が生じる方位であり吉と判断します。つまり、その宮（星）によって吉凶の意味を持つということです。さらに一白水星が入っている方位は進気となり、将来は良い気が生じる方位で小吉。七は悪い方位ではありませんが、三元によって退を現したりします。六は衰気で衰える一方の方位、五は死気で停滞した気ということです。また五黄土星の物を腐らせるという悪い作用があると言われます。四、三、二は殺気

六 乾宮	一 坎宮	八 艮宮
七 兌宮	五 中宮	三 震宮
二 坤宮	九 離宮	四 巽宮

で人間にとって良くない気がある方位と位置づけています。しかし、先にも述べたように、いつを起点にするかでそれぞれの意味が変わってくるので複雑です。

九宮方位と飛宮

この説明は一筋縄ではいきませんが、北木山風水記にある記載をもとに具体例を示してみましよう。なお、中宮に入った星は、乾宮、兌宮、艮宮、離宮、坎宮、坤宮、震宮、巽宮の順番に動きます。まず

基本的な九宮の位置を確認すると上のような盤ができます。

「北木山蔵元風水記」には、

按九宮方位、艮宅、坤掛飛在
 艮宮。飛宮之坤土、助坐宮之
 艮土、為旺氣方。五黄飛在坤
 宮、雖犯五黄之煞、而五黄属
 土、為本宅旺氣、門路却吉。
 とあります。「北木山蔵元風水記」
 で実践してみましよう。
 中宮に艮の持つ数字八を入れ、

九紫・生 九・離 乾宮	四緑・煞 四・巽 坎宮	二黒・煞 二・坤 艮宮
一白・進 一・坎 兌宮	八白・旺 八・艮 中宮	六白・衰 六・乾 震宮
五黄・死 五・中 坤宮	三碧・洩 三・震 離宮	七赤・退 七・兌 巽宮

そのまま先に紹介した九宮の動きにそってそれぞれを飛ばします。すると、下図のような動きを見せます。文書の記載と照らし合わせてみると、飛んだ坤掛は艮宮にあります。ここで言う九運は2ページに紹介した「三元の周期と九運」のうち艮宮を持つそれぞれの方位の意味を参照してください。飛宮の坤土を坐宮の艮土が助けて旺気の方位となります。続けて、五黄は坤宮に入っていることがわかります。五黄は煞の意味を持つ方向ですが、土に属していて本宅は「旺気」にありますから、門路であれば良いという解釈がなされています。次に三元の気運についても実践してみましよう。

按三元気運、道光甲辰起、離掛入中宮、而推算乾飛在坤宮、為死氣方、不吉。同治甲子起、坎掛入中宮、而推算

生 一・坎 乾宮	煞 五・中 坎宮	煞 三・震 艮宮
進 二・坤 兌宮	旺 九・離 中宮	衰 七・兌 震宮
死 六・乾 坤宮	煞 四・巽 離宮	退 八・艮 巽宮

生 二・坤 乾宮	煞 六・乾 坎宮	衰 四・巽 艮宮
進 三・震 兌宮	旺 一・坎 中宮	煞 八・艮 震宮
死 七・兌 坤宮	煞 五・中 離宮	退 九・離 巽宮

兌飛在坤宮、為生氣、尤吉。

まず2ページの「三元の周期と九運」の表を見ると、一八四四年に「離宮」、一八六四年に「坎宮」に入ることがわかります。先ほどと同じように、それぞれを中宮に配してみましよう。上が「離掛」、下が「坎掛」を配した様子です。すると、「離掛」が中宮に入ると乾は坤宮に飛びます。この周期の間、六・乾の持つ意味が死気なので不吉となります。しかし、一八六四年以降は中宮に坎掛が入ると、兌が坤宮に入ります。この時、2ページの表だけだと坎（一運）の七・兌は死気で良い意味を持ちませんが、どうやら本来「兌」の持つ良い部分についての判断が加わっているように思われます。しかし、このあたりは素人判断なので、今後の修正が必要になると思われます。

いずれにしても、この『北木山風水記』はいわゆる八宅風水や三元九運、飛星など、様々な知識の上で判断されています。

事務局としては、今後もより詳しく読むための知識を紹介していこうと思えますので、何か参考になる資料があればご教示ください。